

神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

はしがき

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2006-03-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 太田, 斎, Ota, Itsuku メールアドレス: 所属:
URL	https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1108

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



はしがき

我々の『アジア言語論叢』は今回が第6号である。隔年で刊行してきたから、創刊から数えてもう10年を越えた。既に第2号のはしがきで記したことだが、本誌は庄垣内正弘氏が京都大学に転出され、氏が学内で主催していた『内陸アジア言語の研究』の編集が他所に移ったのを機に、その後を継いで始めたものである。その頃のメンバーの一人、西義郎氏は既に退官され、庄垣内氏は今年度限りで京都大学を定年退官される。そしてもう一人の創成期以来のメンバーの吉田豊氏も今年度限りで本学を辞し、庄垣内氏の軌跡を辿るが如く京都大学へ転出し、庄垣内氏の講席を継がれることになっている。世の移ろいを感じさせる。我々としては吉田氏の栄転を祝福すべきであるが、その一方で本研究班の有力な学内メンバーを失うことに残念な思いを禁じ得ない。今後は学外から協力してくれることを期待したい。

今回は、ベトナム語に関するものが2篇、彝語に関するものが1篇、そして漢語方言に関するものが3篇である。村上雄太郎（レー・バン・クー）氏はこれまでベトナム語と日本語の対照研究の論文を発表しておられるが（2号及び5号）、今回は文法化を巡る論考である。文法化の研究の進展によって様々な言語の関連データが集積されているが、ベトナム語に関する情報はまだほとんど無いのではないか。清水政明、桃木至朗、Le Thi Lien 3氏による論文は14世紀のNon Nuoc山碑文群の碑文の紹介及び分析である。全8基の碑文のうちのNo.8に関するものは既に他所で発表されているが、今回本誌で発表するのはNo.5に関するものである。このような訳でタイトルに（II）が付いているが、独立した論考と考えて良い。そこに含まれる字喃の音韻史的分析の論文は貴重なもので、少ながらぬ反響が期待される。岩佐一枝氏も嘗て彝語の形態論に関する論文（3号）及び実験音声学的研究の論文を発表しておられるが（4号）、今回のものは彝文字に関する論考である。これまで彝文字に関

する日本人による研究は、西田龍雄博士によるもの以外にはなかったと思われる。岩佐氏は現在パリで彝語文献の解読を行っている。今後更に研究を進めて、彝語文献が彝语音韻史にどのような寄与をなすものか明らかにしてもらいたいと思う。また彝族史研究においても新たな事実の発掘をしてくれることを望みたい。漢語方言に関するものは3篇。王彦、王淑霞二氏はいずれも山東大学の錢曾怡教授門下の気鋭の方言研究者である。王彦氏は博士論文の一部を寄せてくれた。この方言は特に「児化」が特殊で、これまで類例が報告されているが、余り詳しいものはなかった。今回のものは同音字表も勿論重要で、一部河南方言の特徴と一致する点も興味を引くところであるが、やはり漢語の形態変化を考える上で、貴重なデータを報告してくれているところが有り難い。王淑霞氏は既に山東方言志叢書の一つとして『栄成方言志』を発表されている。今回はこれまで調査したデータを基に方言音韻史を論ずるものである。中古次濁平声が陰平になる点などは他で余り見られない特徴であろう。今回の論考は周辺の三声調体系を持つ方言の成立を考える上で、何らかの手がかりを与えてくれるかも知れない。班長のものは最近のフィールドワークの報告である。手元には語彙部分もあるが、今回はとりあえず音韻部分だけ発表することにした。今回は長めの論文が集まり、その結果紙幅の制約上収録本数は6篇と少なくなってしまったが、対象言語は3種に亘っており、誌名に恥じない品揃えができたと思う。

2005年10月30日

アジア諸語の通時的、共時的研究
研究班代表 太 田 斎